

「八人の厳しい日本人」

広町 朝陽 (ひろまち あさひ)

序

「もっとも重要なキーワードは」

六十五歳の地質学者エヌ氏が、そこでいったん言葉を切った。額には大粒の汗が浮かんでいた。それから静かに言った。「街の発展です」

会議室にいた全員が大きくうなずいた。

「そのとおり」

議長をつとめる六十六歳の市議会議員が力強く言った。議長の額にも汗が浮かんでいた。「ここにいる我々は全員、そのことを願っているのです」

1

『所沢の未来を考える』というテーマの会議だった。それは年に三、四回、公民館の会議室で開催される。しかし実態は、毎回「所沢を盛り上げていこう」などという抽象的な結論に落ちつくだけの懇談会だった。十名ほどの地元の有力者の集まりで、決まったメンバーの親睦会みたいなものだった。じつさい、会議のあとは昼間から飲める居酒屋にずると流れる。

だが二〇二三年夏のある日、蒸し暑い昼下がりに開かれた今回、たつての願いというところでエヌ氏が参加していた。本来なら部外者は参加できない会議だが、重大な発表があると言う。地元の大学教授ということもあり、今回は特別に許可された。エヌ氏を含めて、これで今回の参加者は八人となっていた。

議長は開会の挨拶をすると、さっそくエヌ氏に顔を向けて言った。

「なにか重大な発表があると伺っておりますが」

ほかの会議参加者全員の視線がエヌ氏に注がれた。

「それではお話ししましょう」

エヌ氏が静かに語り始めた。

「最近の地質調査の発展はめざましい。みなさんご存じかと思いますが、地質調査というのは、地層の断面などからその土地の歴史を紐解くという学問です。私は学生時代からか

ぞえたら四十年以上携わっています。

これまでは、現場におもむき丁寧に掘り返す必要がありました。とても地味な作業です。ところが今ではレーザーを使えるようになりました。これまでとは比べ物にならないほど正確で効率的な調査ができるようになったわけです」

エヌ氏は一息ついた。そして続けた。

「このたび私は、所沢のあちこちの場所で、レーザーを使って地質調査をしました。なぜそんなことをしたかと言うと、今まで所沢を調べたことがなかったからです。

地質学とひと言でくくっても、専門は細かく分類されています。私の専門は古代です。考古学と変わらないほどで、今まで古代に関する調査ばかりやってきました。

そんなある日、気づいたのです。私は、自分が住んでいる街の地質について何も知らないじゃないかと。古代の地質という点に関して、所沢に大きな魅力はないので、今までないがしろにしていました。

こんなことではいかんと大いに反省しました。それで恥ずかしながら、今さらですが、レーザーを使って詳細な調査を試みたというわけです。

その結果は信じがたいものでした。だから何度も調査しました。しかし結果はいつも同じ。もう疑う余地はありません。

この調査結果をどうしたものか、私は何日間も考え続けました。安易に発表して社会を混乱させたくない。でもこれを知ってしまった以上、学者として黙っているわけにはいかない。

考えた末、これが街の発展につながればいいのだという結論に至りました。この調査結果は悲観すべきものではない。むしろ利用価値のあるものなのだと発想の転換をすればいいのです。

では、どう利用すれば街の発展につながるのか。これについて、学問に明け暮れていた私はいい知恵を持ちません。私一人では答えを導き出せないのです。それで街の名士である皆さんに相談したく、こうして参ったしだいです」

全員がエヌ氏の話を真顔で聞いていた。会議室には、いつものんびりした雰囲気とは違う、張り詰めたムードが漂っていた。

「はい、事情はよく分かりました」

議長がみんなの緊張をほぐすように穏やかに言った。「で、その調査結果から何が分かったのでしょうか？」

エヌ氏は手元のペットボトルの水をグラスに注ぎ、それをゆっくり飲み干すと言った。
「UFOです」

2

「は？ 今なんて言いました？」

議長が呆気に取られた顔をして言った。

「UFO」

エヌ氏が繰り返した。

「UFOって、あの未確認飛行物体のことですか？」

「そうです。所沢の地下にUFOがあつたのです」

エヌ氏は言った。「ただし、もう飛べません。残骸です」

会議室がざわついた。参加者どうしがたがいに顔を見合わせ、戸惑った顔をした。エヌ氏の話の内容に戸惑っているのではない。困ったマッド・サイエンティストが会議に紛れ込んでしまったという困惑だった。

その様子を見とどけ、エヌ氏が続けた。

「信じられないのも無理はありません。私も最初は信じられなかった。でも事実なのです」

エヌ氏は強い口調で言い切った。

「ちよつと無理がある話じゃないかなあ」

参加者の一人である、不動産屋を営む六十八歳のタカハシが疑わしそうに発言した。「だってそれが事実なら、UFOが所沢に飛んできて、地下にもぐったということでしょう。人目につかずにそんなことができるはずないよ」

「いや、現代の話ではないのです」

エヌ氏が言った。「UFOが飛んできたのは太古の昔です。だから人目につくこともなかったんです。そのころの所沢には人は住んでおらず、大地が広がるばかりだったんですから。UFOが発見された場所の地層から、そう結論づけられるのです」

「その場所って、いったいどこなの？」

「新所沢。パルコの地下約四十メートル地点です」

一同、のけぞった。予想どおりの反応に満足したエヌ氏がさらに言った。「レーザーを当て、私が作った特殊なカメラで撮影したこの写真を見ていただきたい」

会議室に持ち込まれたモニターに、エヌ氏はパソコンの画面を映し出した。

新所沢パルコを中心に、真上から映した周辺の写真だった。ただし道路マップではないので、一見したところ何が映っているのか分からない。しかしよく見ると線路や駅らしき影が確認できる。そうなればいろんなものの位置関係がつかめる。何がどのあたりにあるのかも見当がつく。そのように見ていくと、まさに新所沢パルコがある位置に大きな丸い影が浮かんでいた。

会議参加者たちはその写真に見入った。ある者は席を立ててモニターに近づいて凝視し、ある者はエヌ氏のパソコン画面を後ろからのぞいたりした。ただ共通しているのは、全員が無言だったことだった。

「この丸い影がUFOだというわけですか」

沈黙を破って、不動産屋のタカハシが言った。

「そうです」

エヌ氏が平然と言った。

「丸いということは、いわゆるアダムスキー型ということですか？」

「それに近いです。西武ドームの屋根を上から見ると角のとれた四角形ですが、あれをまん丸にしたイメージです」

みんなの脳裏を、狭山丘陵にポツカリと浮かぶ西武ドームの屋根が空を飛んでいる映像がよぎった。

「どのくらいの大きさですか？」

「直径約五十メートルです」

「それが地下四十メートルのところにあるというわけですね？」

「そうです」

「これはUFOなのですね？」

「そのとおりです」

タカハシが笑い出した。

「いったい、どうしてこれがUFOだと言い切れるのでしょうか？」

「五十メートルもの大きな円形のものなど、太古の昔の地球には存在しないからです」

エヌ氏が真面目な顔で言った。

「これがUFOなら、宇宙人はどこへ行ったんですか？」

「そこまでは分かりません」

「太古の昔に所沢に人が住んでなかったのは想像できますが、だったらなぜUFOは地下

に隠れる必要があったのですか？」

「それも分かりません。恐竜から身をまもるためだったのかもしれませんが」

「あー」

建設会社の社長、七十二歳のスルガがおずおずと言った。「もしそれが本当にUFOだと
して、それが所沢の発展にどのように結びつくのでしょうか？」

「まさしく」

エヌ氏が言った。「私はそれを皆さんにご提案いただきたいのです。このUFOの残骸
を、どのように活用すべきか」

一同、またたがいに顔を見合わせ、戸惑った顔をした。

「みなさん、席についてください」

議長に着席をうながされ、席を立っていた者たちがぞろぞろと自分の席に戻っていった。

「エヌ先生」

議長が言った。「エヌ先生は、UFOの使い道を皆さんにお考えいただきたいのですね？」

「そうです」

エヌ氏が言った。「ただ、いきなりこんな突拍子もない話をされてもベストな意見が出
るものでもないでしょう。ですから、私なりの意見を言わせていただきます」

一同の真顔がエヌ氏に向けられた。

「私の提案は、テーマパークです」

「テーマパーク？」

議長が言った。

「そうです。普通は何かしらのテーマパークを作るとなると、その費用は何十億円だか何
百億円だかにもものぼると思うんです。しかし今回の場合、それはない。確かに地下四十メ
ートルまで掘り返さなければなりませんし、UFOを傷つけずに引き上げなければなりま
せん。そのための費用は馬鹿にならないことでしょう。しかしそれ以外の費用はほとんど
かからないのです。見せたいものはすでにあるんですから」

「客が来ますかねえ」

内装業者の経営者、四十九歳のヨシズミが心配そうな表情を浮かべて言った。

「私は来ると思いません」

エヌ氏が自信ありげに言った。「だってこれはレプリカではないんですよ。本物のUFO
なんですから。世界中からUFOのファンたちが押し寄せることでしょう。しかも単なる

エンターテイメントではない。科学者たちにとってこんな貴重な研究対象はない。年間を通して、ひっきりなしに人が訪れます」

「一過性の人気に終わることはないということですか？」

英会話教室を営む四十歳のカズコが言った。

「そうです」

「つまり、街が潤うんですね？」

「そのとおり」

エヌ氏がパチンと指を鳴らして言った。「所沢が発展するというわけです」

3

議長が困った顔で言った。

「テーマパークを作るというエヌ先生のご意見は分かりました。しかし、新所沢パルコは所沢市民にとってランドマーク的な存在です。あれを取り壊すというのはどうかな。皆さんはどう思います？ UFOの活用について、ほかにいい提案はありませんか？」

誰も何も言わなかった。たしかにここ数年、パルコの集客が落ちているのは明白だ。しかし、だからといって消滅してもいいと考えている市民はいないだろう。そしてUFOをどのように活用するにしても、いずれの場合もパルコを取り壊すことに変わりはない。UFO活用の提案をするということは、パルコ取り壊しに賛成することにほかならないのだ。しばらくその様子を見ていたエヌ氏が、不機嫌そうにポツンと言った。

「ほかにいい提案もないのにテーマパーク計画は駄目だと言うなら、どうぞご勝手にとうしかありません。私はそれで一向にかまいません」

「では、この調査結果をどう扱うおつもりですか？」

議長が言った。

「じつは私、千葉県のある場所でもUFOの残骸を発見してるんです。太古の昔、UFOは日本をよく飛んでいたようすなあ」

エヌ氏はまたペットボトルの水をグラスに注いで飲んでから言った。「千葉県のは地下十メートルのところには眠っています。写真も撮ってあります。こちらの地下四十メートルよりはるかに浅いのでそのぶん鮮明に映っています」

千葉県知事や地元の人たちは今のところそのことを知りません。でも私が写真を見せてテーマパークの提案をすれば、おそらく飛びつくでしょうな。何しろそこは見渡すかぎり

森で、掘り返すのはたったの十メートルで済むんですから」

その言葉で会議室の雰囲気が一変した。全員が目キラリと光った。それまでは、マツド・サイエンティストをあまり刺激しないように、冗談半分でつき合っている気分だった。しかし状況は変わった。もしエヌ氏の言うことが事実で、パルコの下にUFOが眠っていた場合、その恩恵をみすみす逃すことになる。それだけではない。その恩恵を享受するのはライバルの千葉県なのだ。

「あなたは我々を脅す気ですか？」

議長があせった顔をして言った。

「そんなはずないじゃありませんか」

エヌ氏が強く否定した。「私だって所沢市民です。地元のために何か役立ちたい。だいいちこの調査だって、単なる郷土資料にするつもりではじめたんです。だから千葉より先に、まずは地元の所沢にこの話を持ってきたんです」

「千葉のどこですか？」

「言えません」

エヌ氏がそっぽを向いて言った。

他の者たちは目をつぶって黙り込んだ。全員が同じことを考えていた。千葉県のは地下十メートル。森の下なら開発は簡単だろう。それに対してこちらは駅のすぐそば。開発するには時間も金も手間もかかるうえ、そもそもパルコを取り壊さなきゃならない。

「あのー」

和菓子屋を営んでいるトメばあさんが口をはさんだ。八十一にして今も店先に立っている元気な老婆だ。「そのUFOは、中に入れるんでしょうか？」

「レーザー調査で存在を確認しただけです。損傷具合は不明で、したがって中の様子まではわかりません」

エヌ氏が丁寧な口調で言った。トメばあさんがさらに言った。

「本物のUFOを見られるのは楽しいことでしょうけど、見るだけじゃなく中に入れたら楽しさは何倍にも膨れ上がるんじゃないかと思うんです」

「たしかにそのとおりです。千葉県で撮った写真にはうっすらと操縦席やら機械室らしき影が映っています。壊滅的な腐食は免れたということです。私が見たところ、損傷具合は所沢のものと千葉のものではあまり差はないと思われます。中に入れる可能性は十分にあります」

「そうすると、テーマパークに入場するための料金のほかに、UFOの中に入れるチケットを別に設ける必要があるんじゃないですか？たとえば入場料は千円で、UFOの中に入るにはさらに八百円かかるというふうに」

「素晴らしいお考えだと思います」

「トメさん、ちょっと待ってください」

議長が注意した。「まだ何も決まっていんですから、入場料のことなんて持ち出さないでください」

「でも、早く決めないとこの人は千葉県に話を持って行ってしまいますよ」

トメばあさんが抗議した。「エヌ先生、そうですね？」

エヌ氏が大きくうなずいた。

「ぼくも早く決めたほうがいいと思います」

若干三十一歳、参加者で一番若いハヤトが立ち上がって言った。五年間東京の大手広告代理店に勤めたあと、三年前に地元所沢に帰ってきてベンチャー企業を立ち上げた男だった。「いつも、また今度話し合おうと言ってお茶を濁してばかりじゃないですか。こんなことだからいつまでたっても何も変わらないんです。せっかく目の前にチャンスが来たんですから、これをつかまないとどうするんですか？」

「若い人はこれだから困る」

不動産屋のタカハシが言った。「まだチャンスかどうか分からないし、こんな大きな問題、すぐに決められるものじゃない」

「ハヤト君の意見にも一理あるし、タカハシさんの言うことも理解できます」

議長が言った。「では、本日この会議において決めてしまいかどうか、その決を採るといふのはいかがでしょうか？」

「確認したいんですが」

建設会社のスルガが挙手した。「UFOをテーマパークに活用するかどうかの決ではなく、今日決めてしまいかどうかの決ということですね？」

「そうです。もし今日決めなくもいいということになれば、次回までに皆さんそれぞれが自分の意見をまとめればいいわけです。しかし今日決めてしまおうということになれば、そのためには議論をどんどん進める必要が出てきます」

「やりましょう」

英会話教室のカズコが呼びかけた。「そうしないと話が先に進みません」

挙手による投票の結果、全員一致で今日中に決めるということになった。それは全員がテーマパーク計画に賛成という意味ではなかった。反対者にとっては、こんなバカげた案についてこれ以上議論するのは時間の無駄だから、早く廃案にしたいという意味表示だった。

「えーと」

議長が一つ咳払いをして言った。「立場をはっきりさせておくために、誰が賛成で誰が反対なのかを確認しておきたいと思います。まず賛成の方が、エヌ先生、トメさん、ハヤトくんの三人ということでもいいですね？」

三人が強くうなずいた。

「次に、タカハシさん、スルガさん、ヨシズミさん、カズコさんは反対ということでもいいですね？」

タカハシ、スルガ、ヨシズミの三人は強くうなずき、カズコは弱くうなずいた。この時点では反対が多数だ。

議長が言った。「ではまずハヤト君」

「はい」

ハヤトが議長に顔を向けた。

「ハヤト君はテーマパーク計画に賛成ということだが、それはどうしてかね？」

「だってこういう事業って、普通じゃできない大きなことじゃないですか。個人では不可能なのはもちろん、一つの企業がやろうとしたってやっぱり無理だと思っんです。でも街全体が取り組めばできます。というか、街全体で取り組まないと実現できません。ある意味、これは都市計画です。こんな大きなことは一生で一回あるかないかです。その立ち上げから関われるなんて、こんなワクワクすることはありませんよ」

「えーと、勘違いがあるようだ。テーマパークを建設することになったとしても、君の会社に関わるかどうかは別の話だよ」

「どうしてですか？　ウチはイベントのプロ集団ですよ。広告の打ち方、フライヤーのデザイン、コマースシャル映像の作成、メディアとの付き合い、VIP対応、すべて完璧です」

「テーマパークを建設すると決まればそういうことが必要になるだろう。しかしそれを君の会社に発注するとは限らないじゃないか」

「分かっています。入札になるんだと思います。ただそうすると、ウチが負ける要素はないんです。すべてのノウハウを完全に武器にできている地元企業は、はっきり言ってウチ以外にありません。先月参加した入札のときなんて、パワーポイントを使用したのはウチだけで、あとの企業は資料のコピーを配布していました」

ハヤトは胸を張っていた。「では地元企業ではない、たとえば東京の広告代理店に発注したらどうなるか。費用は三倍以上に膨れ上がります。それが、ウチに発注すればコストダウンになるばかりか、市として税収増にもなるんです。ウチが所沢に税金を払うわけですからね。そして入札時のプレゼンテーションはウチのもっとも得意とするところですよ」議長は話を聞きながら、発注先がじっさいにどこになるのかはともかく、なんて前向きで頼もしい若者だろうと思った。そしてそう思ったのは議長だけでなく全員だった。

5

ハヤトの情熱が会議室の雰囲気を変え始めていた。テーマパーク計画を冷笑している者は、いまや一人もいなかった。UFOは、その存在自体がまだ立証されていない。議論は世界中で行われているが、いまだ結論にはいたっていない。しかしこの会議室において、参加者たちは世界中から続々と所沢に人がやってくる光景を思い浮かべた。参加者たちは顔をまっすぐに上げ、目は希望にキラキラ輝いていた。会議が始まったときには誰もがスツールの背に体をもたせかけていたが、今は背中をつけている者は一人もいなかった。

「ちよつといいかな」

不動産屋のタカハシが上ずった声で言った。「テーマパークを作るってことは、不動産が関わってくるよな？」

「当然です」

エヌ氏が言った。「何しろ大事業ですから、土地の買収がうまくいかなくては話になりません。所沢の事情に精通しているタカハシさんには、そのことで大いに活躍していただくことになるでしょう」

タカハシの顔が上気した。どれだけ大きな商売になるのか、見当もつかなかった。

「そして当然」

エヌ氏が建設会社のスルガに顔を向けて続けた。「開発がはじまった際には、スルガさんに現場の指揮をとってもらうことになるでしょう」

スルガの顔も一瞬にして上気した。一世一代の大事業になることは明白だった。

「そうなる」と

内装業者のヨシズミが言った。「内装も関わってくるんじゃないか？」

「はい、当然関わります。誰か知り合いのデザイナーはいませんか？ もしいるなら、可能なかぎりSF映画をたくさん見て研究しておくように伝えといてください。そして内装工事のすべてを取り仕切ってください」

ヨシズミの顔も上気した。ヨシズミには知り合いのデザイナーがいた。八つ下の四十一歳の女性で、ヨシズミはその女性に好意を寄せていた。今まで相手にされていなかったが、この事業のことを話せば二人の距離は一気に縮むだろう。

「よろしいですか」

英会話教室のカズコが言った。「先ほど、世界中から観光客と科学者たちがやってくるという話が出ましたが、そうなる、それに対応したスタッフが必要じゃないかと思うんです」

「と申しますと？」

エヌ氏が言った。

「外国人がたくさんやってくるというのに、英語もできないスタッフばかりでは困ると思うんです」

「まったくそのとおりですな」

エヌ氏は感心して言った。「そこまでは考えておりませんが、カズコさんのおっしゃるとおりです。外国人対応がしっかりできなければ、所沢が笑いものになってしまう。そうならないために、英会話教室は不可欠ですな。教室も一つでは足りなくなるでしょう。カズコさん、事業拡大の検討をお願いします」

カズコの顔も上気した。

「あの一」

和菓子屋のトメばあさんが言った。「テーマパークができれば、飲食店も必要になりますか？」

「当然です。甘味処も必要でしょうね。トメさんにもご協力いただきたい。『スター・ウォーズ』を見て、どんな店がいいか考えておいてください」

トメばあさんはテーマパーク計画には最初から賛成だったが、それでも顔に皺を浮かばせて喜びを表現した。

反対を表明していた四人全員が賛成にまわった。しかし全員の意見が一致しかけたそのとき、それまで聞き役にまわっていた議長が言った。

「ちよつといいですか。何だか皆さんの意見が賛成にまとまりつつあるようですが、私から一つ申し上げたい」

「何だい？ テーマパーク計画を推進するかどうか、そろそろ決を採ろうよ」
不動産屋のタカハシが言った。

「多数決で決めるので、皆さんが賛成ならそれでいいんです。ただ、決を採る前にもう一度だけ言っておきたいんです」

みんなの目が議長に集まった。

「さつきも申し上げたのですが、新所沢パルコは市民のランドマークなんです。それを取り壊しても構わないんですか？」

「たしかにまあ、心は痛むわな」
建設会社のスルガが独り言のように言った。

「取り壊して、掘り返してみたら、やっぱりUFOなんかなかったってことになったらどうするんですか？」

「それは困る」
内装業者のヨシズミが言った。「俺たちは今、UFOが存在することを前提に話してるんだ」

「そうですね」

議長が言った。「しかし今の段階では、本当にUFOの残骸がパルコの下にあるとは証明されていないんです。エヌ先生、本当にあるんですか？」

「ありますよ」

エヌ氏が不満そうに言った。

「断言できるんですか？」

「できますよ」

「どうして断言できるんですか？」

「さつき証拠写真を見せたじゃないか」

「今の時代、あれぐらいの映像はCGを駆使すれば作れるんじゃないですか」

「私が皆さんを騙していると言うんですか？」

「そうは言ってません。ただ、UFOがパルコの下にあるという証明はまだされてないと言っているんです」

「じゃあ、どうしたら信用してもらえますか？」

「もう一度調査することは可能ですか？」

「もちろん可能ですよ」

「では、我々の目の前でもう一度調査してもらえますか？」

「いいですよ。望むところですよ」

「先ほどの多数決で、今日中に答えを出すことが決まっています。ということは、今からみんなで現場に向かうということになります。エヌ先生、調査の準備は整うんですか？」

「こんなこともあるうかと、隣の部屋に機器を持ってきてあります」

「では皆さんいいですか、今から全員で現場に向かいます」

みんながうなずいた。

「エヌ先生、行きましょう」

全員が腰を上げかけたとき、エヌ氏が言った。

「ちよつと待ってください。調査した結果、UFOがなかったらテーマパーク計画はあきらめざるを得ません。それは理解します。しかしそれだけでは一方的です」

「と申しますと？」

議長が不審な顔をして言った。

「UFOがなかったらテーマパーク計画はなしというなら、UFOがあつたらテーマパーク計画に乗るといふ約束してもらわないと」

「なんですって！」

「私の立場も考えてください。科学的な根拠を持ってこの会議に臨んだというのに、今私は詐欺師扱いされかかっているんですよ」

「いや、何もそこまでは……」

「いや、私の調査を疑うということはそういうことです」

エヌ氏がきつぱり言った。「ですから、私の調査が正しかった場合にはテーマパーク計画に乗ると約束してください」

議長が沈黙した。

会議室に沈黙がしばらく続いたあと、トメばあさんが言った。

「私は、乗っていいと思う」

みんなの視線がトメばあさんに集まった。

「さつき、ハヤトさんの前向きな発言にみんなが魅了されたじゃないですか。私はああいうことが大事だと思うんです。ワクワクする気持ちというんですかね。みんな、そういう気持ちをいつの間にか忘れてしまっています。私だってそうです。さつきのハヤトさんの発言は、みんなにトキメキを思い出させてくれたんです」

トメばあさんが続けた。「それなのに、難癖つけてまたご破算にしてしまったら、もう新しい案なんて出やしませんよ」

「いや、難癖つけてるわけじゃなく、UFOがなければ元も子もないんですよ」

議長が額の汗を拭きながら言った。

「いいえ、同じことです」

トメばあさんがぴしやりと言った。そしてみんなを見渡して続けた。「みんな、将来のことを考えようなんて言ってるけど、本当にそうなのか、胸に手を当てて考えてみてください。所沢の未来を考えるなら、若い活気が必要なことは間違いないのに、そのためのリスクを負う覚悟を皆さんはお持ちなんですか？」

一同、下を向いて沈黙した。耳の痛い話だった。トメばあさんの言うとおりに、所沢にかぎらず、日本全体が元気になってほしいとは思っている。しかしそのために自分の年金が減らされたり健康保険の自己負担が増えたりするのはご免だ。

みんなの様子を見届け、トメばあさんが静かに続けた。

「私だってパルコの下にUFOがあるなんて話、疑わしいと思ってます。でも、今賛成しなかったら、エヌ先生はこの話を千葉県に持っていくんですよね？」

トメばあさんがエヌ氏を見た。エヌ氏が大きくうなずいた。

「だったら賭けてもいいんじゃないですか？」

トメばあさんの熱弁は続く。「みんなで現場に行つて、エヌ先生に地質調査してもらおうんです。そしてモニターに円の影が映った場合はテーマパーク計画を推し進めることにする。映らなかった場合はエヌ先生には千葉でもどこでも行ってもらおう。これでいいんじゃないですか？」

「いや、トメさん」

議長が口をはさんだ。「モニターにフェイク画像を仕込んでおくことだってできるんです」

「疑いだしたらキリがありません！」

突然そう言い出したのは英会話教室のカズコだった。「人生においては、いくらだって賭

けの要素はあります。結婚だって、ある意味では賭けです。相手のことなんて本当にはよく分からないまま結婚するんです。だから失敗だと分かったら離婚することもあります。でも、信じないで何もしないより、信じて進むことで得るものもあります。私だって今は独り身ですが、また出会いがあれば……」

「ちよっと、カズコさん」

議長が止めた。「話が少し脱線しているようです」

カズコがハツとした。

「すみません」

そして呼吸を整えて続けた。「話を戻します。要するに私が言いたいのは、何でもかんでも疑ってかかり、時間をかけて精査し、やっとゴーサインが出たときにはすでに乗り遅れてるってことを、日本は嫌というほど繰り返してきたと思うんです。スピードこそが大事なんじゃないですか？」

「ぼくもスピードが一番大事だと思います」

ハヤトが賛同した。

「分かりました」

議長はみんなの情熱に圧倒されていた。

「では、本当にUFOがあつた場合には、テーマパーク計画推進ということにしましょう」

「よく言った」

不動産屋のタカハシが手を叩いた。

「でもエヌ先生、約束ですよ」

議長がエヌ氏を見て念を押した。「この会議、始まったときからすべてをボイスレコーダーで録音しています。UFOがなかったとき、おかしな言い訳したって駄目ですからね」

「大丈夫だ。約束する」

エヌ氏が言った。「だが議長、テーマパーク計画推進を決めても、すぐに開発に乗り出さなきゃ意味がない。スピードこそが大事なんですからね。そうですね、カズコさん、ハヤト君」

エヌ氏がカズコとハヤトの顔を見た。二人が大きくうなずいた。エヌ氏はそれを確認して続けた。「もしかしたら誰かが千葉にあるUFOを発見してしまうかもしれない。そうなれば日本初のUFOテーマパークの称号を千葉に持っていかれてしまう。だから議長、そうならんために、今ざっと計算してくれ。市議会で賛同を得られるのは、最短でいつに

なる？」

「えーと」

議長が腕を組んで考えはじめた。みんなが議長の顔をじっと見ていた。やがて議長が言った。

「二〇二四年の一月ですね」

「ではタカハシさん」

エヌ氏が不動産屋のタカハシに言った。「二〇二四年の一月に議会でゴーサインが出た場合、土地の買収を完了できるのは最短でいつになる？」

「こんな大事業を逃すわけにはいかない」

タカハシが息巻いた。「二月中にまとめてやるよ」

「ということは、スルガさん」

エヌ氏が建設会社のスルガに顔を向けた。

「三月には取り壊し工事に取りかかってもらわないといけません、できますか？」

「何とかしてみせる」

スルガが威勢よく言った。

「よし決まった」

エヌ氏が力強く言った。そして一堂に向かって続けた。「確認のためにもう一度申し上げます。今から全員で現場である新所沢パルコに向かい、地質調査をする。モニターにUFOの影が映らなかつたらテーマパーク計画は断念、しかし映った場合はテーマパーク計画を早急に進める。これでいいですね？」

「いいです」

議長以外のみんなが声をそろえた。

「結論が出ました」

議長が言った。「二月いっぱい新所沢パルコが閉店しなかったら、UFOはなかったという事です。しかし二月いっぱい閉店した場合、それはUFOがあったことを意味します」

「そしてそれはネガティブな閉店じゃない」

ベンチャー企業のハヤトが元気よく言った。「街が発展するスタートなんです！」

こうして全員は立ち上がると、新所沢パルコに向かって歩き出した。